

研究課題：日中演劇交流史に関する基盤整備—日中演劇文庫創設をめぐる

2020年3月、本学人文学部に長く在籍され、日本演劇研究者として教鞭をとられていた伊藤茂教授が退官され、多数の中国演劇に関する貴重な資料が本学に贈与された。それらは現在旧二杉研究室に保存されている。氏は日本演劇研究者としてだけではなく、日中演劇交流研究のパイオニアとしてその存在を広く知られている。文化大革命直後の1980年代から日中演劇交流話劇人社に所属し、会誌「幕」の編集長もしてこられた。文革後最も早くから日中演劇交流に携わった一人である。この時期は中国が日本に対してもっとも友好的な態度をとった時代であり、中国演劇界から篤い信頼を得ていた氏のコレクションには内部資料も多数含まれている。また40年間の長きにわたる研究生活で、氏のコレクションには図書や雑誌の文字資料にとどまらず、カセットテープ、VHS、VCD、CD、DVDと時代を反映する多様な形態の視聴覚資料が多数含まれている。これらの貴重資料を整理することは、まだ研究者層の薄い日中演劇研究史研究の基盤形成の一助となるだろう。

研究成果として、A 伊藤コレクションの性格と特徴 B 研究の現状 を述べる。

A 伊藤コレクションの性格と特徴

(1) 書籍系（演劇関係の公刊書籍。劇団等が作成のカタログ、年鑑、ガイドブック。未公刊の演劇脚本など）と(2) 劇場で入手する資料（パンフレット、チラシ、チケット群）に分かれる。

(1) 書籍系：公刊されていても部数が少なく、すでに絶版になっていて、入手困難なものが多い。劇団等が作成したパンフレットは市販されず関係者にのみ配布されており、希少性が高い。著者から直接に恵贈されたものには、献辞、署名が入ったものも多く、貴重である。

(2) 劇場で入手する資料：パンフレットは一般に市販されるものではなく、配布も当日の観客に限定されるため、所有者が限られている。公演告知のチラシ（フライヤー）は、枚数としては相当数印刷されるが、演劇公演に関心を持つ人しかそれを手にしない。しかも公演が終われば用済みなため、読み捨てられることが多く、残らない。チケットは、実際にある劇場で、その日時に上演された、ということを確認できる証拠である。ここでは以下のような特徴が見られる。

①収集の対象となるジャンルが特定の1種類ではなく、中国の舞台芸能の網羅的なものになっている。

②1979年からの長期間にわたる資料がある。文革直後から現代までの過程がわかる。

③他の演劇研究者（杉山太郎氏、山崎恵理子氏）のコレクションを吸収している。

B. 資料寄贈の整理、分類、リスト化の現状

書籍（520点）、映像（202点）、音源（カセットテープ 110点）等の資料に関しては、エクセルによるリスト化が終了し、現物は徐々に保管場所（8号館1階書庫）に移管している。だがA(2)劇場で入手する資料パンフレットなどについては未整理である。

今後の課題：2022年は日中国交50周年にあたり「日中演劇交流史」を考えるにふさわしい。その時、伊藤コレクションの上演資料は貴重な一次資料である。今後それらのリスト化を進め、効率的な公表方法を考える必要がある。また、2022年は太田進教授没後10周年にあたり、外部から太田文庫の公開を求め声も上がっている。停止していた整理が急がれる。

いかにすれば数十年かけて収集した書籍や資料を次世代の研究者が活かせるのか。これは申請者にとって喫緊の問題であるだけでなく、いずれ定年退職を迎えるすべて人文系研究者にとって、避けることのできない重大課題であろう。個別の研究者の地道な作業に頼ったり、学問的理解を示す権力者の出現を期待するだけではなく、SNSを使ってまったく新たな方法を構築することはできないのだろうか。今後、理系科学者との共同研究につなげることで課題解決の突破口が見えるのではないだろうか。